

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2005年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	日本文学専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学部・教授	小峯 和明 印	
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>	個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 共同 名
研究課題名	「薩琉軍記」の基礎研究—軍記物語で読む琉球侵攻—		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科日本文学専攻 博士課程前期課程3年	目黒 将史 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2005年度		
研究経費	200千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

慶長十四年（一六〇九）の薩摩藩による、琉球侵攻を主題とする軍記テキスト〈薩琉軍記〉を対照にした。従来、〈薩琉軍記〉は研究が少なく、その内容も周知されるにいたっていないが、100本を超える伝本が存在し、全国の図書館などに散在している。本研究は多岐に渡る〈薩琉軍記〉の伝本を悉皆的に調査するとともに、〈薩琉軍記〉を読解することにより、琉球侵攻をどのように描いているのか分析することを目的とした。全国的に調査を展開し、伝本を大枠の記事の内容で十六の諸本に分類した。諸本を分類する上で、基本的な記事の内容を備えている『薩琉軍談』を中心に分析を進めた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[薩琉軍記] [琉球侵攻] [諸本研究]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1. 〈薩琉軍記〉概観

慶長14年(1609)の薩摩藩による琉球侵攻を主題とする軍記テキスト群の総称を〈薩琉軍記〉と呼ぶ。〈薩琉軍記〉は膨大なテキスト群であり、長大な記述を持つものから、簡略なものまで数多く残っている。そのほとんどが写本であり、唯一、天保6年(1834)から文久4年(1864)刊の絵本『絵本琉球軍記』が確認できるとどまる。

〈薩琉軍記〉は著者・成立年代ともに不詳である。成立を辿る上で、一つ手がかりになることは、『薩琉軍談』などに記される享保17年(1732)に記されたという分限帳の存在である(以下「享保十七年分限帳」)。『薩琉軍談』の成立はこれにより享保17年以前には遡らないだろうと思われる。また『琉球軍記』の成立は、物語中に当代の当主が「忠洪(重豪)」であると語られるため、8代藩主重豪(永享2年(1745)~天保4年(1833))の頃であろうと推測される。さらに奥書をうかがってみても、近世初期の写本の存在は確認できない。奥書に記される年次は、近世中期以降後期、末期のものが圧倒的に多い。刈谷市立図書館蔵『琉球征伐記』は、侵攻からわずか15年後の寛永元年(1624)の本奥書をもつが、本書は『薩琉軍談』の増補系と思われるので、この奥書の信憑性は薄い。なぜ寛永元年の本奥書を有するのかは後考に待つ。これらのことから伝本の大半は、享保17年(1732)から重豪時代(宝暦5年(1755)~天保4年(1833))までの間に成立したものではないかと思われる。

2. 〈薩琉軍記〉諸本分類

本研究では、大枠の記事の有無を基準にした分類を試みた。分類にあたって、伝本の最も多い『薩琉軍談』を諸本の中心にすえた。これをもとに以下、内容を要約すると、薩摩藩の大名島津氏が、徳川家康の許可のもと、軍団を編制し琉球へ侵攻する。薩摩武士新納武蔵守一氏が軍師に任ぜられ、琉球侵攻の指揮をとる。一氏は軍を調べ、琉球へと出兵する。「要溪灘」より侵入し、一進一退の攻防を繰り返す。「日頭山」の戦いでは先駆けをする薩摩武士佐野帯刀が、「都」まで攻め上るものの、琉球の大軍に囲まれ戦死する。その軍功が称えられ、死が惜しまれる。その後、一氏が指揮をとり、琉球国の「都」に攻め入る。王や官人らは捕虜とされ、薩摩へ降ることとなる。この基本となる物語を有しているテキスト群を、ひとまず16系統の諸本に分類した。

- | | | | |
|----------|-----------|----------|-----------|
| ① 薩琉軍談 | ② 薩琉軍鑑 | ③ 薩琉軍鑑記 | ④ 琉球攻薩摩軍談 |
| ⑤ 薩琉軍記 | ⑥ 島津琉球合戦記 | ⑦ 琉球征伐記 | ⑧ 琉球軍記 |
| ⑨ 琉球静謐記 | ⑩ 島津琉球軍精記 | ⑪ 琉球征伐軍記 | ⑫ 琉球国乱記 |
| ⑬ 薩琉軍記追加 | ⑭ 絵本琉球軍記 | ⑮ 琉球属和録 | ⑯ 薩州内乱記 |

①から⑩までの諸本は大筋で物語は一致するが、①『薩琉軍談』のような短いものから、⑩『島津琉球軍精記』などのように27巻におよぶものなど様々である。登場人物の挿話など物語が増幅されている。⑬『薩琉軍記追加』は、琉球大学所蔵本1本のみを確認している。琉球侵攻以後の物語であり、他の諸本とは一線を画す。⑭『絵本琉球軍記』は諸本中唯一の版本であり、挿絵も描かれており興味深い。⑮『琉球属和録』⑯『薩州内乱記』は〈薩琉軍記〉が他の物語を取り込んだり、または取り込まれるなどして全面的に改編されたテキストである。前者は実録作者として名高い堀麦水の手による。

3. 『薩琉軍談』諸本解題

〈薩琉軍記〉諸本中最も伝本の多い系統の本であり、諸本は20本に及び、〈薩琉軍記〉の核となるテキストである。

『薩琉軍談』には鹿児島県立図書館蔵本など、序が付加されたものもある。序によると、慶長14年(1609)に合戦の予兆が生じる。天がにわかには鳴動して、四角い月が煌々と輝く。鳴り響く音は雷のようであり、皆肝を冷やし、騒ぎ立てる者も多かった。この四角い月は、島津氏が薩摩・大隅・日向に加え、琉球を支配する前兆であるとされる。また、神功皇后の三韓侵攻の神話を引き、神功皇后が他国にたやすく進攻することができたのは

研究成果の概要 つづき

八百万の神々のおかげであるとし、四角い月を出現させたこともまた諸天の加護による業であるとする。神功皇后の三韓侵攻と重ね合わせ、琉球侵攻を正当化しようとする。これは〈薩琉軍記〉全体を通してうかがえる姿勢である。

この系統は2種類の諸本に分類できる。1巻本(巻表記なし)、2巻本、6巻本と、5巻本とある。前者を〈甲系〉、後者を〈乙系〉とする。巻数による分類には例外もあり、完全ではない。2巻本の立教大学小峯研究室④は〈乙系〉の構成と同じであり、5巻本の東北大学狩野文庫(K)は〈甲系〉の構成と同じである。〈甲系〉と〈乙系〉とを比較すると、大きな違いは「虎竹城合戦之事」「乱蛇浦并松原合戦之事」の章段が確認できないことである。「虎竹城の合戦」「乱蛇浦の合戦」は、〈乙系〉では描かれない。虎竹城と乱蛇浦の名は、物語の最後の一氏が任じた城代の領地としてみえる。双方の合戦が語られないことは、『琉球攻薩摩軍談』の構成に共通する。

また、備立の記述の後ろに、「享保十七年分限帳」が挿入されるが、〈乙系〉はこの「享保十七年分限帳」を一章段として立項している。その立項は、〈乙系〉の特徴の一つといえる。

結末は、琉球から連行された王・官人と義弘が対面、やがて琉球と薩摩とで婚姻関係を結び、両国が一体のものとなった言祝ぎで物語は終焉する。本系統は、婚姻関係により琉球と島津(日本)とが一体となったことを語る物語である。

次に調査報告の一部として、『薩琉軍談』の伝本リストを示す。*マークの付いている伝本は未見の伝本であり、『国書総目録』『古典籍総合目録』による。

〈甲系〉

- A 立教大学小峯研究室① (2巻1冊。文化13(1816)年、清兼書写)
- B 立教大学小峯研究室② (6巻2冊。文政12(1829)年、山本長悦書写。奥書「福島よりうつす」)
- C 立教大学小峯研究室③ (6巻3冊)
- D 島村幸一 (6巻1冊。安政4(1857)年、城重敬書写)
- E 沖縄県立図書館比嘉春潮文庫 (2巻1冊)
- F 鹿児島県立図書館 (1冊。嘉永5(1852)年、忠栄写。外題「島津家征琉筆記一名薩琉軍記」)
- G 鹿児島県立図書館 (「島津琉球軍記」3巻、6巻中前半の3巻のみ)
- H 東京大学 (6巻2冊。内題「琉球軍談」)
- I 東京大学史料編纂所 (6巻2冊)
- J 東北大学狩野文庫 (1冊)
- K 東北大学狩野文庫 (5巻2冊、外題・内題「琉球軍記」)
- L 富山県立図書館前田文書 (1冊、外題「旧記嶋津氏由緒之事 外拾件」)
☆富山県立図書館ホームページにて公開 (<http://plazasv001.tkc.pref.toyama.jp>)
- M 琉球大学 (6巻1冊、奥書「埼玉郡横根邑吉田書」)
- N 琉球大学仲原善忠文庫 (3冊)
☆琉球大学附属図書館ホームページにて公開 (<http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp>)

〈乙系〉

- O 立教大学小峯研究室④ (2巻2冊)
- P 池宮正治 (5巻1冊。文化3(1806)年、藤原景貞書写)
- Q 渡辺匡一 (5巻2冊)
- R 沖縄県立図書館 (5巻2冊)
- S 彰考館 (5巻1冊)
☆《国文研 32-21-4、E624》
- * T 熱田神宮宝物館熱田文庫菊田家寄託図書 (1冊。寛政12(1800)年)
- * U 関西大学 (1冊)
- * V 九州大学 (文政12(1829)年、菅沢栄治郎写。3冊)

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。